

## ETH Zürich (スイス)

### 自然科学系短期共同研究留学生交流プログラム (COLABS)

#### 留学のきっかけ

高校生の頃から、漠然とした海外生活への憧れがあった。2011年に東北大学薬学部に入學した当初は留学をしたいという気持ちを抱いていたが、日々の授業やアルバイト、サークル活動に追われ、その気持ちも次第に薄れていった。大学3年次の秋、所望の医薬資源化学分野に配属された。ある日、指導教員と雑談をしていると、「みんなも留学行ったらいいよ」と言われ、海外熱が再燃した。すぐに留学支援プログラムを調べてみると、ちょうど翌週に東北大学の推進するCOLABSプログラムの説明会が予定されていた。参加してみると、このプログラムへの申請者があまりおらず、例年定員割れの状況とのことだった。後先考えず指導教員に留学に行きたい旨を伝えたとこ快諾された。当時のCOLABSプログラムの選考では書類選考と英語での面接選考があった。面接ではあまりに拙い英語に失笑されるも、「向こうで頑張つてね」と声をかけてもらい、採択された。留学先は協定校であれば好きに選べたため、薬といえばスイスという安直な考えのもとスイスで天然物化学を行っている研究室を探し、世界的に有名なJörn Piel教授にコンタクトをとった。すると、ちょうど学生を欲しがっているポストドクがいたとのことでメール一通目にして受け入れ先が決定した。

#### 住居・食事・研究生活

スイスの住居探しは難航した。大学からの支援が受けられなかったため、インターネット上の交流サイトから直接交渉する必要があった。半年ほど受け入れ先が見つからず、渡航1ヶ月前にトルコ人オーナーの住むアパートの一室をルームシェアとして間借りできることが決まった。トイレ・風呂・キッチンが共用で月800CHF(当時のレートで約10万円)。なおCOLABS奨学金は月8万円)。オーナーの娘さんや同じアパートの住人とクリスマスパーティーをしたり、海苔巻きを作って日本食を振る舞ったりと交流もあった。アパート周辺には食料品店が徒歩圏内になかったため、まとめ買いのために週末に駅まで出るか、オーナーと車でスーパーに行くしかなかった。キッチンは満足に使いえなかったため、手軽に作れるパスタかオープンで焼くだけのピザばかり食べていたのだが、オーナーは私の大好物なのだ勘違いしていた。留学先での研究生活は刺激的なものだった。英語でのやりとりはもちろん、初めて遺伝子クローニングやタンパク発現実験に触れたことも新鮮であった。また、18時にはほとんどの学生・スタッフが帰宅していたことが当時の私には軽い衝撃であった。研究にも注力しながらも、私生活とのバランスを重視しているところが、魅力的にも感じた。



#### スイス留学を経て...

週末旅行でミュンヘンに行った帰り道、ボーデン湖を渡るフェリーから夕陽を眺めながら、博士課程に進学することを決意した。修士1年次のわずか4ヶ月間の留学であったが、私の人生を変える大きなきっかけになったと言える。今でもスイスでの日々を思い出しては、人生で最高の4ヶ月間だったなとしみじみと感じている。興味があるのであれば、ぜひ学生のうちに留学に行くことを勧めたい。



研究室仲間とETH Zürichの伝統的なダンスイベントPolyballに参加。



## シンガポール国立大学

### 学術振興会・海外特別研究員制度

#### 留学のきっかけ

上述のスイス留学の初日、私の指導担当者が歓迎会を開いてくれたのだが、集まったのは私を除いて2名だけであった。1人は指導担当者、そして、もう1人が後にポストドク留学時にお世話になるMorinaka博士であった。Morinaka博士は、私が博士号取得後の進路として海外留学を決意した頃に、シンガポール国立大学(NUS)で研究室を立ち上げた。2019年に日本に講演に来た際にポストドクを募集しているというのを聞

き、すぐにポストドクとして留学したい旨を伝えた。顔見知りであったため、特に面接も無く、自分でお金を取ってきたらという条件付きで承諾を得ることができた。結果として、内藤記念科学財団と海外特別研究員制度の支援のもと渡航した。

#### 新型コロナウイルスによる渡航制限

新型コロナウイルスの蔓延による世界的なパンデミックの影響で2020年4月渡航の予定が2021年3月に延期となった。PCR検査とホテルでの2週間の隔離

生活から2度目の留学が幕を開けた。その後も感染者数が増え始めると研究室に入室可能な時間がシフト制となり、満足に研究ができない期間も少なくなかったが、2022年以降は大きな制限はなく研究に邁進できた。若手PIの小規模な研究室であったため、研究室の主力として研究に取り組んだ。その甲斐あって、2年間の成果をもとに執筆時点(2024年12月)で2報の原著論文を発表することができた。

#### なぜシンガポールなのか

なぜシンガポールに留学をしたのかと聞かれることが多い。確かに周りの研究者のほとんどは欧米諸国に留学をしている。気になるのは当然である。しかし、申し訳ないのだが、期待されるような明確な理由はない。次は欧州以外で過ごしてみたいと思っていたのと、アメリカは皆が行っているため乗り気になれなかった。そんな時に、スイスで唯一歓迎会に来てくれたMorinaka博士がポストドクを募集しているということに縁を感じた。また、(これが大事なのだが)東南アジアでの生活にワクワクしたからである。…参考にならない回答である。が、十分だとも思う。



#### おわりに

本記事は、2024年4月8日に開催された東北大学薬学同窓会講演会「第7回グローバル薬学人講座」にてお話しした内容をもとに構成しております。本企画をご提案くださった薬学同窓会会長・平澤典保教授に深く御礼申し上げます。